佛國古今通史

和装本
リ伊り
414
2

同攻會印

佛國古今通史卷之二

目録

第六章　カルロウ井ンジアン家續きの事
第七章　ヒウ、ケペットの即位より十字合戰の初
　　囲る至る
第八章　ノルマンジーの事歴
第九章　十字軍の初囲よりフヒリップ、オ、ガスチュ
　　スの即位る至る

帝國圖書館藏

目録終

帝國圖書館藏
9
414
の

佛國古今通史巻之二

秋山政篤　譯

第六章　カルロウヰンジアン家續きの事

ロドルフ死に臨み及んで佛國統御の權再びヒウの手に歸せり時に紀元九百三十六年なりヒウ乙父より讓られたる巴黎の領地に加ふるに佛國及びボルゴニヤ[1]の侯領を以てせるを雖も王の名稱を嫌ひ并に貴族の嫉を怕れて又王位に登る事を辞し英國に逃れたるシャルレスの子ルイを召還して王位に即しめんと謀り

しが英王アセルスタン其偽計を畏れ甥ルイを還れ事を欲せざりしよりルイハ望郷の念慮止み難くして遂に歸國に及びけるが佛國の人民盛んなる禮式を以て之を饗應せり其後ヒウそルイをリームスに伴ひ此地に於て第四世ルイの名を以て即位の禮を行ひしが元來ルイの人と為り器量勇胆父祖に勝まりと雖も更に名譽義氣なりしかで是が為めに他の美事も併せて無益に屬するに至れり抑ヒウのルイを迎へしハ其真心より出づと雖も之に王名を加へんと欲せしのみにて更に已れの政權を解くの意なし然るにルイも深く政權を得ん事を務めしかで是より隙を生じて遂にルイに敵するの心を起しを限制して自由を得せしめば其後王領に於て僅に一を餘したるレヲン州をヒウに讓るに及んで始めて其限制を緩めたり

是に於て僧徒等會議してヒウを譴斥し羅馬法王も亦之を破門するに至りしかバ僧徒及びロルレンのビシヨッフ等盡くルイの味方となり數年間連綿たる戰爭を起せり此時ヒウに同盟せし者にて最も著名なる者は當時極めて威力ある貴族の一人にてノルマンシー侯ウヰルレムなりフランデル侯ヒウヰルレムに私怨ある

を以てルイを合體し偽計を行ひて遂にウヰルレムを暗殺せり其後ルイハ養育の名義を以てウヰルレムの遺子リチャルドを迎へしがフランデル侯の為めに鼓動せらるゝ正に之を殺さんとせしにリチャルドも幸に其師オスモンドの計畧に依り僅に其禍を免れ外舅センリス侯の許に脱走して其保護を蒙り其後程なくルイもセンリス侯の為めに生捕れしが其因辱を免れんが為め先に不道を以て奪ひ取りしノルマンジーの地を還さしゝバリチャルドも竟にノルマンジー侯となる事を得たり抑リチャルドの人となり性質善良にして常に敬神の

心あり故に所行も亦仁恵なりノルマンの史家稱して勇敢なる者と呼び敬神慈愛勇猛の三ツ者に因て其一代を概説もと云ふ

紀元九百五十四年に當り第四世ルイ行年三十三歳にして馬より落て没せしが子二人あり兄をロゼルと云ひ弟をシャルレスと云ふロゼル王位に即く時甫て十四歳なりと雖とも其母及び外舅にして聖僧のブリュノ舷く國政を治むるを以て佛國の人民大に泰平に浴せし事三年の久しきに及べり斯に有名なるヒウてルイに後るゝ事二年にして没せしが其子ヒウ、ケペット父の富

貴を受け且名譽を欲ひるの志を繼げりと云ふ

日耳曼帝オゾ佛王の舊領ロルレンを奪ひ取り臣下を封ぜるの法を以て之をロゼルの弟シャルレスに與へ

うでロゼルを此州を失ひしを怒り國民も亦王子シャルレス外國に服從ひる上も我等も名譽を失へりと甚ぞ之を悅ばひ始て離叛の意を生ぜるに至れりロゼルも憤怒に堪へず戰爭の布告をも待ずして遽に兵を募りオゾをエークス、レ、シャペルに於て襲擊し殆んと之を生捕んとせしに是時オゾも正に午飯を喫せしが不意を襲はれて大に驚き狼狽して食案を飛下り駿馬に鞭て

僅に危急を脫れ〻うでロゼルも直にオゾの宮殿に乱入し盡く貴重の器物を奪ひ取り輜重に載て巴黎に凱陣せり其後オゾ報復の兵を起して佛國に攻入り進んで巴黎の城門に迫まるも雖もヒウ、ケペット能く此府を固るを以てヲゾを之を破る事能はず空く威武を示して怒りを散じ遂に歸陣に及びけるが途中に於て麾下の兵を率ゐて已にエイン河を渡れり然れ共後陣の兵を遥に後れ夜に入て河邊に到り此處に宿陣せしが其夜エイン河遽に滿水して渡るべくもあらざりしに佛王ロセル大軍を率ゐて後より嚴く攻めらるれを後

陣の兵進退度を失ひて大に敗北せりオヅも之を救ひ
んと欲ひ北共溺々たる水勢に支へられて進む事を得
ひ徒に手を束て味方の敗走を目撃ひる計りなりしが
遂に一小艇を求め出しアルデン侯を載て佛陣に遣ち
ロゼル汝と接戰して勝負を決せんと言送れり然れ
とも佛國の貴族等も我王を危急に臨まむる事を欲
せひ且オヅ仮令戰に勝得ても決して之を國君に仰く
まじと答へて其事を肯ぜひ
恁て日佛兩國の王遂に和睦を結びしがロゼルも程な
く卒死せり此時紀元九百八十九年なりロゼルの子第

五世ルイも父に後るゝ事兩三月にして死せしかど査
尓曼の血統獨りロルレン侯シャルレスに存ひきて相續
の正統に當るべきにシャルレスの性質不良にして大に
佛國人民の悪ミを受け且日耳曼帝に臣下の禮を取て
ロルレン國を領するも佛國に對して叛逆の所業あり
と思ふる故に相續の權之に及ぶひして巴黎侯ヒウゝケ
ペットに歸ひヒウの親族も古の大臣の如く永年佛國を
管制ひる實權を執る者なり
新朝ケペチアン家に移るの前に於て今日に至る迄の形勢を
熟知ひる事簡要にして殊に最も注意ひべき事も僧徒

の侵奪を恣ゝせしと封建制度の創立せしと武官の始て起りたるとゝ在り茲ゝ查尓曼の子孫在位の間僧徒の威力を增ゝ原因を尋るゝ當時歐洲の文運甚た衰廢し世間學問ゝ從事ゝる者千百の十一ゝして文學全く僧徒の手ゝ歸せしゝを契約緣組等の書記裁判ゝ至る迄盡く僧徒の手を經ざる者なし是ゝ於て國法教法と混亂せり僧徒ハ大ゝ富貴威力を得るの道を開けりと雖も貴族より平民ゝ至る迄皆不幸ゝる厄運ゝ陷り殊ゝ僧徒の緣組ゝ關係せし事大ゝ人民の妨害を釀成せり抑從來緣組と國法ゝ屬して政府の支配ゝ係りし

に此ゝ至て僧徒婚姻と元來宗門ゝ關係ゝゝ之の說を唱へ之を管轄ゝるの權を得て七世の親族内ゝ於て婚姻を結ぶ事を禁ぜしゝを人民大ゝ困難を生ず何くゝて妻を求むべきゝを辨ぜざるゝ至れり羅馬法王と已ゝ人民の緣組を定め且免許を與ふるの特權を握りしゝバ公侯の國事に預るの威力をも得るゝ至れり此時宗門の汚辱最も甚しく徒ゝ種々の儀式を以て粉飾し巡拜を行ひ供物を奠へ古代神聖の遺骨を得る時と前ゝ犯したる大罪をも贖ふべしと思て之を尊崇ゝる事信神修德の道ゝ勝れり是ゝ於て前代清明なる時

に當り人の惡業を拒ぐに必用なりし僧侶の譴斥も今
は仇怨を復ひる用具となり人の為めに幸福を祈る僧
侶も是に至て却て咒詛の用をなし宗旨の破門を處置
の便と報讎の事とに因て行ひ國君貴族に至る迄其
所有を奪ひ取んとし或は之を驅役せんと欲ひる時と
直に破門を行ふに至きり
此時僧徒の風習極めて不善にして酒色に耽る事甚し
く其弊風蔓延して羅馬法王も亦其禍毒を蒙り宗門の
汚辱此に至て極きりと云へ然るに僧徒は獨立して政
府の裁判に服せざりしかば國君と雖も此の如き放蕩

を限制ひる事能はず
封建制度の行はきしより貴族は領地に割據して威權
を振ひ政治苛虐にして且侵掠を擅にせしかば領地に
在ては固より暴君にして他領に於ては盜賊と異なら
す去まは隣國互に呑噬を逞うして不測の擾亂常に斷
えす生民を塗炭の中に苦めしかで僧徒等此擾亂を拒
がんと欲し天帝の休戰と稱ひる事を布告して水曜日
の夕より月曜日の朝に至る迄暴戾の所業を為ひる者は
贖罪法に處し或は破門の罰を蒙らしめんと定めしが
遂に此法を以て過嚴なりとし其時間を縮めて土曜日

の日没より月曜日の日出迄休戰にべしと定め其時限の外に殺傷盜賊を恣にする事を許せりと云ふ

斯る武官の起きるを以て稍、此時代の怖るべき患害を緩くするに至り去れば武士と稱する者こ已の名舉を得ん事を務めて諸國を巡歷し人民の危急を救ひ且婦女子の為に大に力を盡さしむる當時に在て法外なる所業を支へ人民を扶けし事大方なるに抑、法令具らざる時は武士なる者無罪の人を保護して災害を救へるこ自ら其益なきに非ずと雖も元來戰爭を好こ各、武勇を試ん事を渴望せしより後代に至り十字軍と稱する戰爭を起せり然れ共氣概の風を起し畏る可き爭鬪を和げしは武士の俠氣を尊び仁惠を施さしに由きり

第七章　ヒウ、ケペットの即位より十字合戰の初迄に至る

抑、ヒウ、ケペットの人となりを按ずるに其器量は中人に優らざると雖も頗る有用の才ありて實地の知識を具へしかも須め僧徒の威力盛んなるを理會し父の所有とせし豐饒の寺領を再び僧徒に與へて已れの味方とせり是より前きヒウこと土足にて射ら聖僧リクヲイルの墓に參詣しリクヲイル已れに王位を與ふるを約せりとの

説を設けしが此に至り人民の信用を得んが為め僧徒のカに依て益其説を傳播し遂にノヨンの集會に於て國王に選ばれ其後リームスに於て禮式整然として王位に即きぬ

ロルレンのシャルレス我が佛王に選されざりしを以て遺恨に堪へ難しと雖も戰場に於てヒウとカを角し難さが故に欺作奸計を以て其私欲を遂ん事を謀りしが幸にヒオンの僧アーノルフも已きの兄ロゼルの庶子なりしがバシャルレスも此僧を我が手に懐け遂に其誘引を以て難なくレオン府に入り父祖の宮殿を押領し

舊臣のカに依て王位に登る事を得たりヒウ、ケペットハシャルレスの事業大に進みしに驚き其謀主アーノルフを引離して我が味方に屬せんと思ひ之をリームスの第一等ビショップに昇きしにアーノルフも更に其心を變ぜし却てシャルレスをリームスに迎へ入れたきどゝ陽に其跡を掩へんが為めに已きを捕縛してレオンに護送せしめたりヒウも之を聞て怒を發し遂に軍勢を募りレオンを圍みしが城兵の為めに不意を襲されて敗北し已む事を得ず退陣せりレオンの闘解しがシャルレスも已に患ふべき者なしと思ひ日夜觀樂に耽り

て國事を怠りしゝをヒウの敗北シャルレスの幸福とならびして却て其不運を招きアンスレインと云者の宿望を達する機會となれり抑アンスレインをレヨンのビショップとして久しくシャルレスに背く心を抱きしが

シャルレス王位に登りし時陽に力を盡して奉戴せしゝをシャルレスも毫も疑ひ深くこを信任せしに是に至りアンスレインも時機已に至れりと思ひシャルレスの油斷を窺ひヒウをレヨンに招き夜に乘じて城中に迎へ入れしゝをヒウもシャルレス及び其妻を生捕りこを牢獄に繫ぎしゝ二人ゝ遂に獄中にて沒したりシャルレ

ス四子あり二人の男子も獄中に出生せし者にて後に日耳曼帝の守護を受け佛國の王位を既に望を絶ちし如くありしもこ二女子も父母生捕られし時日耳曼に在りを以て幸に其禍を免れしが一女の子孫後にフヒリップ、オ、ガスチュスに嫁せしを以て後代佛國の王家も査尔曼の血胤なりと云ふ其後程なくアーノルフを鞫問を受るに至りしがアーノルフの一黨僧侶の裁判も國王の權外なれば直に羅馬法王の處置を受けさるべからずと主張せしも雖ども オルレアンの僧も大に之を非とし國王の裁斷を受る事適當なりとの說を唱ふる

より評議官其説を採用せしかどもヒウを躬ら之を鞫問せんとて裁判所に出張せるにアーノルフヒウの前に跪き向後必ず背反の意を抱くまじと誓ひしかどもヒウ仍て僅に死一等を免し其官職を奪ひ取り之に代るに高名なるゲルベルトを以てせり抑ゲルベルトの原因を尋るに元來農家に出生せし者なりしがオーリラックにて沙門となり文學に從事せしに天資頴敏にして直に衆僧に超越せしかど遂に社中の嫉みを受け已むを得ず寺院を去りて西班牙に轉居し此地に於て亜剌比亜人に就き數學及び窮理學を研究せしが深く其道に

達し頗る神妙を極めしを以て世人或は之を魔術士と疑ひけれ共佛王及ひ日耳曼帝深く其聲名を欣慕し諸子を教ふるの良師ありとして之を招待せり

恁てゲルベルト進んで第一等ビショップとなりしかども全國の僧侶盡く之を嫉みアーノルフ羅馬法王の許を得ずして退職せしめ事を口實としゲルベルトの官位を廢せん事を羅馬法王に訴へけるに法王も衆僧の訟を容れて直に使を佛國に遣はしアーノルフを舊職に復ひすべしと言送りしかばヒウい法王の威權を畏れ已むを得ずゲルベルトを廢しアーノルフを舊職に復

せしゞ徒よ其名を改めしのみよて其實全く行されば
アーノルフと依然として獄中よ繫がれしゝ共ゲルベ
ルトと以前の門弟日耳曼帝第三世オゾ（ラウヱンナ）
の第一等ビショップ官を賜ハり後遂よ羅馬法王よ昇進
―第二世シルウェステルと云へり
ヒウ在位十年よして紀元九百九十九年を以て死せ
りを其子よて信神者と異名を取る第一世ロベルト
繼で王位よ登れり當時佛國の史家此王を神聖と稱せ
りと雖も方今よ至ていハ愚人として之を記せり抑ロベ
ルトと天性不才よして且妄りよ法教よ心醉せしゝを

僧徒等其機よ乘じて偽計を逞うし之を陷るゝ事を得
たり茲よロベルトよ嫁せしベルザ（ボルゴンヂー族
コンラットの女なりしゝ）性質善良よして容顏美麗なり
と雖も不幸よして此王と四世の親族内よある從弟な
るよ由り羅馬宗緣組の法律中よ在りしよ佛國のビシ
ョップ等其婚姻よ一致せしゝを羅馬法王第五世グレゴ
リー甚だ之を喜ぶ斷然之を廢せんと欲し佛王若し
后妃を離別せざる時と直よ破門の罰を行ひ且王よ左
祖する僧徒と盡く之を廢せんと決定せり然るよロベ
ルトハ深くベルザを愛するを以て速よ法王の命令よ

従て遂に破門の罰を蒙むると雖も猶ベルザを離縁せざり此時代の人民ハ法教に迷眩する事甚しくして王の寵臣と雖も猶ロベルトに奉事するを欲せざる左右に侍する者と唯二人の従者のみなりしが此者に至る迄王の手に觸し器物を汚れたりとして火を以て之を清むるに至れり

然るに臣下の者ベルザの離縁を懇願する事頻りなりしかどロベルトと頗る之を厭ひ且之を肯せざる時と謀反を企るに至らんと恐れ遂に離縁の議に一致せしかばベルザも已むを得ず泣々尼院に退隠せり其後繼て後妃となる者をアルレス矣の女コンスタンスと稱する者にして其人となり倨傲残忍にして飽迄名譽を好み金銀を散ずる事土芥の如く全く愉快に心を奪はれしと云へり然るにロベルトも遂に宮中の樂を懶しと思ひ益僧徒を信じ謂まをを迷眩に陥り只管苦行に時を費しけるが妃コンスタンスも聊か憚りなく數多の詩人及びプロウェンスの妙齡なる貴族等と共に飲宴に耽り歡樂の聲日夜宮中に斷えざりと云へり

此時に當りサラセン人ベラスタインの基督宗の者共に暴戾を行へりとの報歐洲に達せしかば歐洲擧て之を

憤らざる者なし是より於て羅馬法王第二世シルウェストル（サラセン）人征伐の為め十字軍を起さんとの説を唱へたるも其事行れざりして憐むべし無罪の猶太人（サラセン）人の間者となりて力を盡しの嫌疑を蒙り遂に基督宗各國に憤怒を泄すの淵藪となり無根の疑に因て人民の虐殺を蒙る者多し抑中古時代に於て基督宗派の者も猶太人を困厄に陥るを以て己れの善業となせしが故に不幸なる猶太人と數其災害を蒙るに至れり

ヒウケペットの弟ボルゴンデー侯ヘンリー子なくして

死せしかどもオツ、ウサルレム（ヘンリーの妻前に嫁せし夫に依て設けたる子）其國を受領せり然るに佛王ロベルト相續の權に於ても己れ其血統に當れりと思ひ兵力を以て其志を遂んとせしが我が力の及ぶを以てノルマンデー侯に應援を乞ひ其助けに依て大軍を帥ゐオーセル府を圍みしが此府を陥るに近傍にある聖僧ゼルメンを祭る寺を取る事簡要なるが故に佛兵正に之を襲んとせし時一人の僧出て王に見え神聖の靈地を汚して畏れありとして王を諫めしが其言未だ終らざるに近隣の川より烟霧忽然として起りしかど兵卒等も之を不測の變

と思ひ恐れ惑ひて口々に神聖其堂塔を拒げん為めに降りて王と戰ふれるべしと叫びつゝ王を初めとして全軍盡く遁走せり初回の戰に此變あり故其後両三月を墓々しからぬ戰ひに其日を送りしがウサルレム遂にボルゴンヂーの貴族に其身を貶してロベルトに矢筈を讓りしかを戰爭を此に終りしかを共ボルゴンヂー國の威力及び實益を猶ウサルレムの手に在りしと云ふロベルトの長男早く死し次男も愚昧なるをもつてヘンリーを選て相續人と定めしに妃コンスタンス之に抵抗し我が幼子ロベルトに王位を繼しめんと務めしが兄弟の友愛親睦にして破り難く且佛王ロベルト平生の情弱に似ず確乎として動かざりしかをコンスタンスの陰謀之が為めに一度び画餅となりかを共猶奸計を運らし其後遂に王族をして争鬪不和を起さしむるに至れりロベルトも此に至て信神の念猶已に諸の靈社に巡拜せしが歸路メロンに於て劇しき熱病に犯され行年六十才にて終に此處に於て没したり時に紀元千三十一年なり

第一世ヘンリー位に即んとせし時母コンスタンス及び弟ロベルトに抵抗せりと雖もヘンリーをノルマ

ンヂー侯の助けを得て盡くこれを平定し遂に王位に登る事を得たり其後コンスタンス尼院に退隱して程なく沒しけるがヘンリーもロベルトの我に敵せし事多くして其意に出でずして母の勸めに因りて思ひ舊の如く信任するのみならばボルゴンヂー州を與へたりヘンリー在位中最も著名なるはモスコビー皇帝シャロシスラスの女アンを娶るに在り此時代に緣組の障礙甚だ大なりてヘンリーも父の覆轍を畏れ血族の妻を娶りて破門の難に逢ふなりと寧ろ人の知らざる遠國なりしを迎るに如かじと思ひ遂に此女を娶りたるぞ

是時僧徒の跋扈甚だしく且貴族の爭鬪盛んなりて是より起りたる災害其極度に至れり去れば後に第七世グレゴリーの名を以て羅馬法王に上りしヒルデブランドと云者高僧の職を奉ぜし時大に實效を顯はし歐洲全國を僧侶の擅制に從はしめんと盡力せしと云ふ斯に貴族の威力强盛なる事又甚しく其身固より王の幕下たりしも雖も互に爭鬪を開く時も恰も國君の如しヘンリー在位の時に當り陣を張り備を設けて大戰せし事數度にして之が爲めに戰死せる者其數を知らざるヘンリー三子を遺して死せり時に長男フヒリップ甫て七

歳たりしが先王の遺言を守り攝政の職を以てフランデル侯バルドウヰンに任ぜしに此人佛王を保護する事佛國を守護するが如く配慮せざりしを以てフヒリップも教育を受ぶして成長せり故に情欲を限制する事能はず百事意の赴く處に從ひしと云ふ恁て年十四歳に至り攝政バルドウヰン死せしかば始て限制を免れ心の儘に振舞ひしより幾許もなくフリイツランド侯ロベルトと不和を起し戰端を開きしが戰ひ利なくして已むを得ず和議を乞ひ剩へ條約中の一條に依り枉てロベルトの繼母を娶るに至りしがフヒリップも固より此配合を快しとせざれば二三年を經て七世の親族内に在るの口實を以て之を離縁せり其後紀元千九十三年に至りフヒリップエンジョー侯フホルクの妻ベルトレードを誘て其夫を去しめ物議をも顧みず恬然として此女を娶れり羅馬法王第二世アルバン屢其非を舉て脅迫せしも雖ども更に聽用せざりしかを遂に之を破門せしがフヒリップも猶之を恐れず我が先妻已に死し且フホルクも亦堪忍して其婦を去し上は誰に憚る事あらんと唱へベルトレードと室を共にして日夜歡樂に耽りしと云ふ紀元千九十四年に至り東國に於てサラセン人の掠奪

甚〻〻て耶蘇の靈地ゼリュセルムを陷し〻て羅馬東帝已に我が安危に係るを以て大に驚き急に使者を羅馬法王に送り歐洲の諸國を鼓動し〻サラセン人征伐の為めに同盟の兵を起し我が危急を救ん事を乞へり法王い之を聞てサラセン人の暴横を憤り歐洲各國の君に説て兵を起さん事を勸めしかど不幸にして十字軍を起すに至れり是時に當りノルマンヂー矣維廉(ノルマン)英國を攻て之を陷れ此地に於て始て大業を起さしと云ふ

第八章　ノルマンジーの事歴

紀元八百年代より千百年代に至る迄引續て歐洲の南方を襲ひ〻國民と其初め皆人種の本を同くせし者を漸く其國の技術づ土地を蚕食〻て居所を定め〻者を漸く其國の技術を採用し〻掠奪の風習を改めて日用耕作の道に從事せり然るに其後此國を襲ふ者も亦同種の群族なれども先に来り〻人民と其風習已に異なるを以て固有の勇氣を失へる者となり〻我が種族とする事を欲せずして之を苦難に陥る事現今の住民始めて國を奪へる時其土人を惱ま去〻と異なる〻ば去れば吉凶禍福を糾へる索の譬の如く不列顛内の索遜人ゴールに在るゴッス人

及びフランクス人と其初めセルチック種の土民と殘惡なる所業を蒙らせしが同戻循環して後とデーンス人及びノルマン人の為めと苦しめらるゝに至れり又査尔曼と痛く索遜人を窘めしが其内數多の勇士スカンジナウヤアに遁逃し我が殘酷を蒙りし事を其國民に告げ復讎の意を勵ましゝをスカンジナウヤアの海賊等佛蘭西北方の海岸を蹂躪せし事已に査尔曼の在位中に在りと云ふ

シャルレス、ゼ、シンプルの在位中紀元九百十二年に當りノルマンの大將ロルロ佛國を襲ひしが是れノルマン人剽掠の終りなりと云ふこの時佛王シャルレス自國の蹂躪に罹るを恐れ且ロルロを味方に屬せんと謀り子ウストリア州及び我が女を與へしゝをロルロも遂にシャルレスに屬し是より子ウストリア州をノルマンディーと改め第一世ロベルトと稱してノルマンディー侯となれり其後シャルレス躬らブリッタニー州を治むる事能はざるを以て又之をロベルトに讓れり然るにノルマンディー州にてもセルチック種なるゴール人の殘民久しくフランクス人の暴虐に苦しゝを皆悅んでロベルトの公平なる處置に服從し加之土人も從來の困苦を

免れんと欲し「ロベルト」の味方に屬する事斷えざりしかども臣下の數日々に多きを加ふるに至るとは雖もブリッタニー州に於てもノルマンヂーに異り住民の人望を得る事容易なるざりしと云ふ抑ブリッタニー州もゴール西北の邊隅に在て古昔之をアルモリカと稱せし處にして最も勇氣あるセルチック人此に住居し能く其土地を守りしかども此時代ゴールの州郡も大約暴民の侵奪に罹りしも雖もアルモリカも獨り之に抵抗して其蹂躪を免るゝに至れり後に索遜人不列顛に遷居せし時數多の土人アルモリカに走りしに此地の住民不列顛の土人も已れと同種族なりと思ひ之に移住を許しけるを不列顛人も居所を此に定め北方の海岸に蔓延して當今バンと稱する地に至りしが是より此州を稱してブリッタニーと云へり恁て此國の人口次第に繁殖し且セルチック種の人民亦此地に輻湊して同一の國語狹隘なる處に波及せしを以て當時他の州郡に行はれし羅馬語も獨りブリッタニー州に入る事を得ざりしとぞ是に至てロベルト此州を領せしにブリッタニー人も嘗て索遜人の為めに驅逐せられし災害を記憶し深く外國人の管轄を蒙るを嫌ひ我が獨立を定る機會を

伺ひけるが遂に エラン及びベレンゲルと云へる首長の命に從ひ死を顧ゝしてロベルトに抵抗せしうむロベルトも百方力を盡し僅に之を鎮定ける事を得たりと雖も敢て殘忍なる所業を施さず首長の已を國君と仰ぐを以て滿足せりと云ふ

紀元九百十二年に至りロベルトノルマンヂー侯の位を其子維廉に讓りて退隱せしが其後三年を經て死したりロベルト及び其子孫に至る迄所行甚だ尊ぶべくして同時代の者と大に懸隔せり就中ロベルトは常に公平の處置を施し常て旗下に免狀を授て權利を與へ外國人の我が領内に居住ける事を許せり故に史家皆稱賛してロベルトの在位中は甚だ太平無事にして金銀を通衢に遺失けるも更に盜賊の患なきに至れりと云へり

維廉在位の初に當りフリヅタニー人蜂起して之に叛き加之ノルマン人も畏るべき謀叛を企てしが維廉智勇を以て盡く之を鎮定し能く父の基業を繼で怠りなく治國の道に從事せり殊に王矣の危急を救ひし維廉の常務の如くなりしと云ふ去れど打抹王ハロルドと久しく維廉と親睦の交を結ひしが叛子スウェーンの為めに

廢せられし時ノルマンディーに遁逃して救援を仰ざ
うバ維廉も信義を重んじ直に其頼に應じて反黨を折
く故を以てハロルドも再び舊位に復せる事を得たり
紀元九百三十九年に至り巴黎矣ヒウ第四世ルイの位
を廢せんとせし時維廉も佛王を助け大に其力を盡し
たるバルイの王位を全したる事多くも維廉のカに依
るり又フランデル矣アーノルド謀叛して隣國なるモ
ントレウル矣ヘルビンを其國より驅逐せし時維廉も
平生の義心此に發し忽ちヘルビンの味方となりアー
ノルドと決戰して之を打敗りヘルビンを舊位に復せ

しうもヘルビンも深く其德に感じ厚く恩義に報ぜん
としたれども維廉も固く辭して受ざりしと云へ抑義
氣善行も福祿を招くの道なるに悼きかな維廉の義
戰却て枉死を招くの基しなりアーノルドも公戰に因
て敵をる事能はざるを以て隱謀を運らし之を倒さん
と思ひソンムの一島に於て維廉と會合せん事を乞ひ
是時維廉を從者より引離して遂に之を虐殺せりと云
へり

維廉の死せる時其子第一世リチャルド年猶幼ありしか
ども四人の貴族國政を掌るゞ就中最も拔群なる者も

ハルコート矣ベルナルドなり茲に佛王ルイを嘗て維廉の力に依て王位を全うせしに忽ち其恩に負き巴黎矣ヒウに謀りシャルドの領地を奪んと欲し大軍を率るてノルマンヂーに入りシャルドの亡父維廉の復讎を遂る為めなりと唱へけるノルマン人も聊か疑ふ心なく之をローエンに迎へしルイも忽ち幼子シャルドを捨て之を教育したるの名義を以て巴黎に送り直にレオンに禁錮せしが其後フランデル矣アーノルトの勸めにより之を虐殺せんとせしに此時シャルドの師オスモンドも忠義の心を勵して幼主を救もんと

思ひ遂にレオンの城中に入り難なくシャルドを救ひ出し之を枯草の中に匿し馬に秣ふを以て口實とし容易く城門を逃れ出てシャルドの外舅センリス矣の許に達する事を得たり

是時に當りハルコート矣ベルナルドも百方謀を運して佛王及ひ巴黎矣ヒウの間に不和を生ぜしめ又丁抹王ハロルドに密使を送り詳に方今の形勢を報ず同心一致してノルマンヂーを恢復せん事を乞へりハロルドも故維廉の恩義に報するも此時にありと思ひ異義なく其頼に應ず兵を帥るてノルマンヂーに到着せ

うむベルナルドも聊も猶豫せず兵士を募りて直ちに之
と合併せりルイも堅く一致せる兩國の兵と爭ふ事能
はざるを知て和議を乞ひけるを兩國遂に其請を許し
盟約を結ぶんが為め佛丁の兩王會合して條約の箇條
を議せしに一箇のノルマン人敵軍の中に於てモント
レウル侯を見認ためて其不義を憤り痛く恩を忘るゝ
事を罵れり然るにモントレウル侯も更に恥る色なく
却て傲慢なる辭を以て之に答へしかば其座に連りた
る一箇の丁抹人怒りに堪へず前後を顧みず即坐に
モントレウル侯を打殺せり此騷擾より兩軍大に激動

して互に王の命令をも待ず入亂れて奮戰せしが佛兵
盡く敗衂して和を謀りたるルイも遂に擒となれり然
るに兵士もルイを辱めず却て尊敬を極めたるども之
を許す時に至ても強てノルマンヂーをリチャルドに返
し數多の償金を出さしめたりと云ふ
リチャルド年長ずるに及び天資英邁にして盡く父祖の
良質を受け繼ぎ威力ある敵に其四境を圍まると雖ども
聊も屈撓せず能く我が領地を守りて平安ならしむる
事を得たり恁て後リチャルドもヒウ、ゼグレートの女を
娶りしかば佛王ルイ大に畏るを抱き日耳曼帝オツボ

ルコンデー王コンラット及びフランデル矣アーノルド
と同盟してヒウ及びリチャルドを殪さんと企つと雖ど
も數、蹉跌して其志を得ざ巴黎に於て事を謀る共遂に
無益に屬ぐべきを以てノルマンデーに向て進發せし
が圖らざりリチャルドの伏兵に陷りて其精兵を損しロー
エンの城壁前より退還されたり
巴黎矣ヒウ、セ、グレート死せしよりリチャルド信實を盡
して其諸子を保護せしに因て再び佛王の怒を起し又
戰端を開きしが大に敵兵を惱して後遂に敵の奸謀兵
力を挫き強て和睦をこはしむるに至れり其後紀元九

百八十七年に至りヒウ、ケベットリチャルドに助けられ佛
王の位を得たりしを從來の敵國一變して信義同盟
の國となれりリチャルドの在位中ノルマンデー甚き昇
平無事にして歐洲に於て最も繁榮せし國の一に居れ
りと云ふリチャルド死せるに及び其子にて善良勇悍の
稱を得たる第二世リチャルド父の後を繼ぎけるが在位
の初に當り國中の人民一揆を企て加之異母弟ヒーム
ス矣謀反して兵を擧しりを國中頗る騷擾きつ也ども
リチャルドを速に之を鎮定して弟を獄中に繫ぎしが五
年の星霜を經て紀元千三年に至り弟も竊に獄中を脫

しりチャルドの田獵する時を伺ひ粗悪なる弊衣を服し
請索たる有様よてりチャルドの前ゑ跪き信實後悔の色
を顯して罪悪免許の事を願ひ出しりをりチャルドも寛
大の心を以て弟の過失を許し剩へ盡く以前の所有を
與へたり
是時ゑ當て英國の王エセルレット丁抹人ゑ壓せられ殆
んど危急ゑ迫りしゃも威力ある同盟を得んが為めゑ
りチャルドの妹エンマを娶りて其救助を乞ふと雖も丁
抹王スウエサンも勢燄甚ど熾んゑしてりチャルドの應援
を以て猶之を驅逐する事能はざりしゃをエセルレット

も已むを得ず英國を退去しりチャルドの許ゑ逃れて暫
くゑ依頼せり此時佛王もノルマンヂー近隣の諸侯
を鼓動して盡く之を聯合せしゃをりチャルド獨力を以
て破り難きを知り丁抹人ゑ應援を乞ひ其大兵を國中
ゑ迎へしが程なく佛王も和議を講ずるゑ至りを是ゑ
於てりチャルドも已ゑ前門の虎を禦げども後門又狼を
招くの厄運ゑ陥れり其事を尋るゑ丁抹人も佛王和議
を講ぜしより我が掠奪の望を失ひしを怒りブリッタニ
ーゑ兵を向け畏るべき暴横を恣ゑせしゃをりチャルド
も已むを得ず大金を出して其退去を謀りしが是より

丁抹及びノルマンヂーの兩國親睦の交りを失ふに至
きり
りチャルドの人と為り深く信義を重んず頗る古昔君子
の風あり去まむブリッタニー矣ジョッフリーと云者りチャ
ルドと數回鋒を交たりと雖も其信義の厚きを洞觀せ
しゆむ後に信神の為め靈塲を巡拜せんとせし時其旅
行の間りチャルドに自國の政を攝せん事を請へり是時
ジョッフリーも圖らひ殺害に遇ふと雖もりチャルトも益
信義を守り能く其諸子を保護し其子年齡長ずるに及
び盡く亡父の所領を與へたりと云ふ

英國王エセルレット死するに至り丁抹王カニウト王位
を奪ひしゆむもエセルレットの妻エンマと二人の子を携
へ已む事を得ずノルマンヂーに走りて其兄に依頼せ
り去れバ紀元千二十六年に當りりチャルドも英國を襲
もんとせしに船隊颶風の為めに破られしが故にカニ
ウトと和睦を結び剩へエンマをカニウトに與へて之
と再緣せしむ去まむエセルレットの二子是が為めに英
國の王位を相續する福運を失ひしが數年の後エセル
レットの子にして懺悔人の稱を得たるエドワルド英國
に還り再び祖先の王位を繼ぐ事を得たり恁てりチャル

ドは能く自國を綏撫し人民に幸福を與ふる事已に久しくしてチャルト及びロベルトの二子を貽して死せり

第三世のチャルド長く國政を執る事能はず相續の後纔に十八箇月を經てローエンに於て沒せしが人皆弟のロベルトの之を毒殺せりと云へり信て寛大威嚴の稱を得たる第二世ロベルト兄の後を繼しが在位の初に當り一揆の為めに國中大に騷擾せりと雖も遂に之を鎮定して最早畏るべき者なしと思ひければ紀元千三十五年に至り信神の為めペラスタインの靈地に詣でんとせしが其途中に於て亜細亞の氣候の為めに痛く其身の健康を害せられ旅行の自由を得ざりしかども已むを得ず乘物に駕し四人のサラセン人に之を昇かしめてペラスタインに至りしに其途中にてノルマン人の禮拜者に逢ひしが禮拜者ロベルトに向て我歸るべき時君の事を如何に傳へ申べしやと尋ねしかばロベルトは汝歸郷の日我四人の鬼に昇せられて極樂參りをなすを見しと傳へよかしと答へしとぞ信てペラスタインに達し宿願を遂げたまひども歸路ビジーニア中のニースに於て死したり

ロベルトペラスタインに至らんとする前に正統の嫡子

なきを以て庶子維廣を我が後を継しめんと定めしゝで國政に與らる者會議して其事を領承せり然るにロベルト死去の報歐洲に達する時國中の貴族等逆意を抱き一致して維廣を除らんとたくみしも政務に與らる者は斷然として以前の決議を固守し維廣を國君と仰ぎしゝば仮令國乱を釀し數〻干戈を交たりと雖も維廣も智勇を振ひ盡く逆乱を平定せり此戰を以て士卒等頗る兵事に熟練し且數回に勝利に因り維廣の威力名譽大に顯れしを以て今日に騰乱却て後來の幸福を開く基となれり茲に英王エドワルド英國に歸りて後

ノルマン人を寵愛して幕下の索遜人を嫌ひ殊にケンリ侯ゴドウヰンの親族も英王に後を相續ぐべき者なれ共更に之を忌て死後もノルマン侯維廣に王位を讓らんと約せしに エドワルド死して後カニウトの子ハロルド英國に王位を續しゝば維廣も勇猛なる兵士を帥る航海して英國に上陸しヘスチングに於て激戰し雄雄を此一舉に決せしゝば遂に英兵を打敗り國王ハロルドを殺し全く英國を押領してノルマンに管轄せしたりけり時に紀元千六十六年なり是よりノルマンヰーに事歴佛國及び英國の事歴と相關渉するに至りし

云ふ

維廣英國を奪ふ前に當りノルマンは縉紳四十人ゼリュセルムは靈地に巡拜して歸路サレル府に迫りしサラセン人を驅逐して此府を救ひしに因り府下の住民厚く其恩に報ぜんとせしに固く辭して受ざりしが此事早く伊太利全國に聞えしかば其國中は諸侯等深く其義勇に感じ金銀を惜まずしてノルマンは兵隊を倩ふ者多し去れば子ーブル侯もケピア侯と戰を交へし時ノルマンは兵隊を倩ひしが大に我が用をなせるを以て其賞として廣大なる土地を與へしに因りノルマンは人もエウエルサ府を此地に築て次第に此に群集するに至れり其後紀元千四十六年に至りノルマンチーは縉紳にして ホートウヰルは タンクレットと云者は三子親族は為めに新に侯領を伊太利國内に起しカタバン羅陳馬は朝廷に於て官長は尊稱よりレピダリアを奪ひ取りし後自他は士官と共に此地を分てり然るに三子は中にてブラスデフヘルと云ふ者兵士に選ばれ始てレピダリア侯となりしが其卒するに及び同胞ドロゴン及びハンフリーと云者侯位を相續し其後又弟ロベルド、グイスカルドと同盟合一せしを以て直に伊太利は强敵となれり去れ

バ羅馬法王第九世レオ是等ハ強族ト寺院ハ所有ト雖
モ敢テ掠奪ヲ憚ラザリシ時伊太利ニ在ルノルマン人ニ敵抗シテ
更ニ餘國ト同盟ヲ結ベリ此時伊太利ニ在ルノルマン
人ト纔ニ三千人ニ過ギザリシガ尊敬ハ禮ヲ盡シテ使者
ヲ法王ニ送リ此國ニ於テ土地ヲ賜ル事ヲ得テ臣下ハ
禮ヲ行ハンヿヲ約セシニ法王モ之ヲ肯セザリシカモ
ノルマン人已ム事ヲ得ズ兵ヲ起シテ法王ハ軍勢ヲ打
敗リ遂ニ之ヲ擒ニ捕ラヘレドモ聊カ無禮ヲ為サズ却テ
其前ニ跪キ己レガ願ヲ許サン事ヲ乞ヒシニ法王モ遂
ニ之ヲ承諾セリ

バノルマン人モ直ニ法王レオヲ免セリ

初メノルマン人モ伊太利國内ニ領地ヲ起ントシト雖モ
猶公然タル免許ヲ得ザリシカモ屢第九世レオニ懇請
ヲ為シシニ其事未ダ遂ゲザリシガ紀元千五十九年ニ
至リロベルト、グヰスカルド第二世ニコラス法王ヨリ前
ニ押領セルレピグリア及ビカラブリアハ地ヲ盡ク已
レニ賜ハルベキ許シヲ得タリシカモ積年ハ宿志全ク
終リ遂ニ法王ハ臣下ニ列ベキ誓ヲナセリ恁テノル
マン人モ又法王ヨリ更ニ領地ヲ賜ハルハ許シヲ得兵
ヲ諸方ニ出ダシガ伊太利ハ南方ニ於テ希臘ハ兵ヲ攻

め又シリーに於てサラセン人を襲ひしが向ふ所當る者なく戰ふ毎に勝利を得て全く其地を平定せり
を初め法王は所領を許さし時は其地皆敵國にして徒に空名を授けしのみなりと雖も是に至りノルマン人も實に其國を領する事を得るに至れり

第九章　十字軍は初回よりフヒリップ、オ、ガスチュスは即位に至る

是よりノルマンヂーは事を措て又佛國の事歷を說んに斯に羅馬法王第二世アルバン己に佛王を破門さたりと雖も日耳曼帝と爭を起し殆ど危急に迫らしかば直に佛國に逃竄せり時に紀元千九十五年なり恁て法王はクレルモントに於て集合を設け詳にペラスタインの形勢を說き兵を擧て逆徒を靈地より驅逐せん事を勸めけるが是より先きピカルヂーの僧にして宗門に心醉せしペートル、ゼ、ヘルミットと云者ゼリュセルムの巡拜より還る時許多の禮拜人彼の地に於て逆徒の困辱に罹りし事を演說して人心を感動せしが此僧の演說衆人の心に貫徹し深く逆徒の暴行を憤りしに今又法王の為めに鼓動せられ人々思ふに奮發して法王の辭未だ終らざるに異口同音に今日暴亂の徒を攘ふ事

深く天帝の意に叶へりと叫びけり是に於てアルバン法王と從來王侯の有せし僧侶に官職等を與ふる權を廢し再び佛王フヒリップを破門し且尓來僧侶も必ず國君に隨從すべからざると命ぜしがその後各州を巡行し至る處の人民に十字軍に同心一致にべしと令し又我に抗する僧徒を廢し且我を助くる僧侶に免許を與へたり

佛國人民も十字軍に心を奪はるゝ事狂氣の如くなりしを以て尤も畏るべき災害を起せり去れどペートル、ゼ、ヘルミットと及びノルマンの縉紳なるオントルと稱に

る者不法蒙昧にして隊伍も整はざる佛兵三十万餘を帥ゐて一番に出陣せしが此軍勢宗門に心醉する餘り途中にて已に猶太人を逆殺し且過る處の國々を剽掠して分取狼籍限りなかりしかば遂に諸國人民の怒りを起し其復讎を蒙るに至れり恁てペートル、ゼ、ヘルミットも孔子坦に到着せし時東帝アレキスコミニュス懇に之を接待して愚蒙の佛兵を小亞細亜に進ましめしが未だゼリュセルムの靈地に達せざるして過半も飢渇困苦等の難に罹りて死する者多し

其後ウォーロン侯ゴットフリー堂々たる精兵を帥ゐて十

宇軍に赴く時に當り佛國は威力ある貴族も其軍隊に加はりしが就中尤も名譽ある者は佛王の弟ウェルマンドイ侯ヒウ及び英國を奪掠せし維廣の子ノルマンヂー侯ロベルトフランデル侯ロベルト、スチーブン王は父ブロイス侯スチーブン、トーロース侯レーモンド等にして屢戰ひを交へて互に勝敗ありしと雖も紀元千九十九年七月十五日に至り歐洲は兵（十字軍を云ふ）遂にゼリュセルムは地を奪ひ取りペラスタイン内に於て新に基督宗の國を起せり恁て歐洲は兵も意の儘に逆徒を打攘ひしかば佛人は中に本國に歸る者ありしに本國にある

佛人等は靈地を棄て歸るを不敬ありと誹謗せしを以て其兵は之に勵まされ再びエクライテン侯ウォルレムは命を奉じてペラスタインに發向せり抑ウォルレムは謀畧は才遥に文學の藝に劣りしかば直に羅馬東帝と爭論を起せしに奸詐なる東帝は其身に受たる無禮を雪んが為め反覆してサラセン人に通じ欺て歐洲は兵を狹路に導きしかばサラセン人は其機を誤らず烈しく之を襲擊して打取る者數を知らず僅に貴族數名を脫もるれみなりしと云ふ

佛王は旗下に於て最も猛勇なる者をペラスタインに在

て無益に事に死生を顧みざ已まに力を費ちしに フヒリップ
プを朝暮酒色に沈湎して更に國事に注意せざ已に法
王より破門に許を得てベルトレードと同室に樂を為
し且其生子王位を繼ぐに權ありと布告せるを見れば
法王は嚴に離縁に箇條を責ざりしおるべし
フヒリップ紀元千百八年を以て在位十五年にして死せり
此王在位の間佛國の衰頽最も甚しく其領地一百里英に
里法に過ぎざりしが後代に至り又漸々に威力及び土地
を恢復せるに至れり
第六世ルイ即位に日佛國の人民盡く喜悦して奉迎せ

り是より先ミルイも父王と共に政事に與かる事已に
久しかりしが時に佛國の諸侯中に盜賊の魁首となり
已きの築大る城郭より突出し屢旅人を惱まして其行
李を奪ひ取り及び諸方の國々を巡迴蹂躪せる者あり
ルイも國内に此の如き暴乱の徒あるを患ひ赫然と奮
發し我が大勇を見はして無頼の徒モントレリ、モントト
フホルト及び其他の諸侯を平定し公道に依て盡く之を
罪を糺せり去れハルイも已れに智勇を以て一舉に國
中に患を除きしかを人民皆其德を慕ひ大に之を敬戴
せるに至りと雖もベルトレードもルイの譽を嫉み且

所生の子フヒリップ王位を得せしめんと欲しルイを欺て毒殺の術を施せしがルイも幸に名醫の治療に依て死せざる事を得たりと雖も全く其害を除き去ることは能はず身體常に安らかならずして死に至るまで顏色平生に復せざりしと云ふ抑ルイは幼少のときより教育を蒙らずして成長せりと雖も天性勇氣を好み常に武道を修明して古代より武道に於て稱する處の名譽義氣を其身に備ふるに至せり且其身體甚だ肥大ありしも尤尋常の人にては物の用にも立ざるべきを進退動止極めて敏捷ありしとぞ是時に當りて佛國の形勢尤も衰頽に赴き豪傑の膂力を振ふに非ざればバ殆んど挽回すべからざる時なればルイの此に出たるも實に佛國の幸福と云ふべし

ルイは已に威勢を以て暴徒を壓しなれども貴族の逆乱未だ已まず此方を鎮定ればバ彼方に起り各處に於て暴威を振ひしかばルイも東奔西走日夜干戈に苦めるに剩へ異母弟フヒリップ王に背て反黨に與し逆焔益盛んなりと雖どもルイも鋭氣少しも撓まず力を盡して逆徒を芟除し遂に麻の如く乱れたる州郡を平定してさしも跋扈せし貴族は威權を減削せるに至れり其

後二三年を經て紀元千百十九年に至り英國王第一世ヘンリーノルマンデー州を奪ひ取り其矢ロベルトを捕へて之を牢中に幽閉せしかを其子ウヰルレム已むを得ず佛國に遁逃せり此時ヘンリーそノルマンデーの境界に堅城を築き佛國を壓せんとはかる勢ひありしかをルイはウヰルレムは我が國に來れるを時とし其領地を復して之に與へ己れの味方とせんと欲し遂に英國と戰端を開きブレン子ウヰールに於て兵鋒を爭ひしがルイも英兵は為めに敗北はすれども元來英佛兩國も共に金を以て生靈を贖ふに因り死傷甚だ少からしと

云ふ是れ兩國初めて干戈を交へし時にして此時の戰爭激烈に及ぶべしと雖ども此後に至り兩國の戰ひ殘酷を極めしかを死傷甚だ多くして流血草木を漂はすに至れり

英王ヘンリー猛勇を佛王ルイに及ぼすと雖も極めて智畧に長せしかを兩虎相爭はしむるの策を設けルイをして日耳曼帝第五世ヘンリーと爭を起さしむる計畧を企てしが果して日耳曼帝を英王の謀に陷り羅馬法王カリックステスを伊太利より追出せしかを法王も已むを得ず佛國に逃れ來りしかをムスに於て會議を設

け大聲して日耳曼帝を破門に罪を蒙らしめん事を唱へ出せり去きを日耳曼帝を法王に無禮を憤り直ちにムスを蹂躙せんと決心し大軍を帥るて佛國に臨ミしりゞルイを之を拒んとて古來佛國に傳ふる神聖に國旗を飄へして軍勢を募りしに數多に臣下其旗下に集る者恰も螻蟻の羶臊を慕ふが如く先を爭ひて輻湊し忽ち二十萬に軍勢に及べり佛國の勢ひ此の如く盛んなりしりゞを日耳曼帝大に之を怕れ佛兵と未だ一合の鋒をも交へにして逃るし如く全軍を帥る萊尼河を渡りて本國に歸りしりゞルイを此舉に乘じてノルマンディーを襲ひ其不庭を罰せんと欲せれ共貴族等皆思ひけるを一度び不順の臣を罰せる例を開く時を後日に至り我等亦其禍を蒙るの患あらんとて此征伐に一致に事を嫌へりと云ふ

紀元千百三十一年に當りルイの長男馬より落ち幼年にして死せしりゞルイを深く之を哀悼し是より事務を執る事平生に如くならず二男ルイ即位せし後浮世の事を打捨て全く來世を營むが如くなりしが紀元千百三十七年に至り死期愈迫りし時ルイを不朽の格言を其子ルイに授けて云ひけるを王國を元人民の委任

せし者なれど處置の善惡を問ひて死後に至り其得失を精算せざるべからざる事を記憶せよと遺言して没せり

ルイ在位の間要用なる條律を設けし事數多なりしが就中最も著名なるは王權を以て制し難き貴族の威力に抗せんが為め府邑の人民に許しを與へ協合して社を結び各其權利を守らしめ且人民中より其社長を選ぶ事を許せるにありと云ふ其後十字軍の起るに及て貴族等軍費を辨ぜんが為めにルイの例に效ひ人民に自由を許して金を募りしかを人民益權利を得て會社の體裁漸く定り大に商方の進歩を導きしと云ふ

ルイ聖査尔曼の舊例に從ひ裁判人を置て國中を巡廻せしめ諸族の領地に於て不正なる處置を蒙る者あれば直に歎願に出る事を得せしめしかば是に因て大に貴族の權柄を折き且人民の為めに許多の災害を掃ひ上下一般浩大なる利益を蒙ること至り是等の方法を大抵僧徒にして宰相の職に在るシーガルの方畧より出しと云ふ

ルイ在位の間寺院の數增加せし事夥しく隨て僧侶の威權益熾にして國務に關せる者甚だ多かりしが就中最も著名なるを信神能辨の名を得たるクレーウホーの

聖僧ベルナルドなり此僧能辯にして秀逸なるを以て国王羅馬法王を敬重せらるゝのみならず國王國民に至る迄大なる之を尊信せりと雖も實地の才能なきを以て有益の功をなす事能はざりしと云へり茲にアーノルドと云へる僧と當時僧侶の國務に關して威權を專にするを非とし方今僧侶は政事に與らるハ其本職を汚す者なりとの説を主張せしが名譽を好む僧徒等大に之を憤り務めて其論を沮止せしもアーノルドの説は全國に禁ぜらるゝ東向西顧盡く施す處なきに至ると雖ども人皆其風采を慕ひ漸く其門徒に加はりしかを羅馬法王も

アーノルドの説人心を感動して遂に我が威權を妨ぐるに至らんかとを恐れ心を責るに法教に負きたる罪を以てして焚殺の刑に處せり

第七世ルイは兩三年前より父王と共に政事に與りしが性質極めて激烈にして常に僧徒は專横を憤りけるを即位の後直に僧徒と爭ひを起せり其事を尋るに此時僧徒ブリュージスに集會して第一等ビショップに登るべき者を選べるに偶ルイの常に快しとせざるペートルを擧げしかをルイは之を喜ばず更に選擧を命せり茲に羅馬法王第二世イノーセントの法王に登き

るを大抵佛王のカによるなインノーセントを却て僧侶に左祖し己れが威權を以てペートルを第一等ビショップに定めたれどもルイを猶之を嫌ひ更に承伏せざりしかも法王遂に佛の全國を禁制して上下一般盡く宗教に關する事を得さらしむるに至れり

爰にシャンパン侯チボールもルイに敵て兵を擧げ僧徒に味方せりと雖も其本心も宗門の為めに力を盡すに非すして名譽を求むるに在りしとぞ此時に當り聖僧ベルナルドも國王信神の心なくして宗門に抵抗せりと唱へ人民を煽動して全國の騷亂を起さしむるに至りしかもルイも聊か猶豫せず速に軍勢を募り紀元千百四十三年に當りシャンパンに攻入りピトリー府を襲擊して之を陷れ數多の住民を殘殺せしかば府下の人民等恐惑して寺院に籠り其禍を免れんと思ひ先を爭ひて千三百余人の住民寺中に逃入りしもルイも殘酷なるも士卒に命じて堂塔に放火せしめしかば憐むべし院中に籠りる府民一人も殘らず灰燼となりて失にけるルイも憤怒の餘り前後をも顧みず斯る殘酷の所業を為したりとも其後深く之を悔い日夜悲嘆に沈みしかば聖僧ベルナルドも其機に乘じ罪業消滅の説を以

て王を鼓動し再び十字軍を起さん事を勸るるルイも正に悔罪の事に思ひ惱める折柄なれば遂に心を動かして其說に一致しウズレーに於て集會を設けベルナルドと共に棧敷に登り來會せる衆人に向て天帝の為めに回々宗の門徒を征伐せん事を論說せしに人民皆踊躍して之に左袒し錐も立ざるが如くに群集し我後れじと其募りに應ぜしかば豫め備へ置し十字の章己に竭て盡く給する事能はざりしかばベルナルドも我が衣服を裂て其代用と為るに至れり是時ベルナルドも全軍の總督を委任せらるると雖ども天性論說に長せしかむ軍馬に跨て跋涉するよりは郡國を游說するの益あるに如ずと思ひ其職を辭して佛の全國を巡廻して之を鼓動し全く其功を遂げ、也も轉じて日耳曼に至り州郡に論說し遂に三寸の舌を揮ひて全國の人心を鼓舞し盡く十字軍に屬せしむるに至れり徒て紀元千百四十七年に至り日耳曼帝第三世コンラット及び佛王ルイハ第二回十字軍の總大將となり數十万の大軍を帥ゐ蛟龍波濤を翻へし猛虎長風に嘯くが勢ひにて出兵せしが徒に容儀の盛大なるのみにて其實は大將無智にして兵事に疎く士卒分離して一致せず操練

整ハずして進退自由ならざ希臘（東羅馬ヲ云ふ）人ハ大ヨ歐洲の兵を恐れ遂ヨ叛して之ヨ敵するヨ至りしハ兩國の兵甚ど振ハず戰ふ毎ヨ敗衂し初め目ヨ餘りし大軍も或ハ死し或ハ散し今ハ殘り少なヨ及びしハ憐むべし兩國の王ハ宿志全く矛盾し已む事を得ず軍服を脱棄て窶々巡拜人ヨ姿を變じ辛うしてゼリュセルムの靈地ヨ參拜し徒ヨ汚名を殘して歐洲ヨ歸りなるが初め進發の時ハ千軍萬騎前後を擁衛し威風凛々として草木を靡かしヨ此ヨ至り僅ニの從卒ヨ扶けられて蕭條として入國ヨ及びしとぞ去れば此征伐の如く不

幸なる事前後ヨ比類なし

茲ヨルイハ妃イレオノラハ元来ポイトー及びエラオイテンを讓り受し者なりて後ルイヨ嫁せしハ豐饒なる此二州ハ遂ヨ佛國ヨ合するヨ至れり然るヨ十字軍の起るヨ及び夫と同行して征伐ヨ赴きしガルイペラスタインを直截して行進せる時イレオノラハ夫と分れてアンチオッヽヨ留り夫の安危をハ顧みず放蕩ヨ耽りけ甚バルイハ之を快しとせず歸陣の後直ヨ離緣せんと決心せり

佛王ルイ遠征ヨ赴ける時僧シーガル留守の任を奉じ

王に代りて國事を掌りしが王に隨行せる者と何きも萬死に災厄に苦けるに國中の者とシーガルの良政に因りて盡く大平安全に浴する事を得るより初め十字軍の說起りし時シーガルも其企を非として大にルイを諫めたるが良藥口に苦きの譬にて其說遂に容られずしてベルナルドの威權に靡倒せられしが又イレオノラの離緣に付之を止めけるどもルイは亦之を聽ず從來禁制さる親族に當るに口實を設けて遂に之を離緣せり其後六週間を過てイレオノラは英國王第二世ヘンリーに嫁せしが前に佛國に歸せるエクオイテン

及ひポイトーの二州も英國に合せるに至れり是に因て佛王英王互に猜忌の心を起し遂に戰端を開きしが二十年間に久しきを經て爭亂猶已まず其間時々僅に和睦を結べるに過ぎずと云へ共徒て兩國和睦して稍平穩なりし時羅馬法王第三世歷山伊太利の爭亂に因り己むを得ず佛國に逃れしが英佛兩王同く法王に謁し共に其馬轡を執て預め設け置きたる旅館に導き厚く之を接待して深く服從の意を表せり

ルイは深くヘンリーを怨み之を困むる事を謀けるに適英國に於て著名なるゾーマス、エ、ベケット國王ヘンリ

ーに抵抗し加之ヘンリーの諸子父王に叛て屢兵を擧るに至りしゥバルイも之を時とし力を盡して叛臣逆子を助けたり茲にヘンリーの妃イレオノル引の事を豐饒なる二州を以て英王に嫁せしゥバ必ず大に寵愛を蒙らんと思ひの外却て其夫に疎まるゝに至りしゥバ大に恨を含み諸子を煽動して各其領地に據て謀反せしむる事を企てたり去きバノルマンヂーに在るヘンリーブリッタニーを領するジョッフリーエクオイテンを有するリチャルドも何れも其期を約せし如く一同に謀反の旗を飄へして父王に敵抗するに至れり然るに此戰ひ叛黨一致してヘンリーを攻るに非すして互に相怨む事諸子の父王を怨むに倍しく各〻奸謀を逞うして之を陷れんと計りしが其中の一人ジョッフリーは暴言を吐き父子兄弟相爭ふは從來フランテシ子ッツ家の相傳なりと布告せり此爭亂中ルイは奸計を運らして數〻鄙劣なる擧動を為せしゥ殊にローエンを圍める時其住民を欺て休戰を許さしに住人は之を信じて一旦番兵を撤せしゥはルイは其虛に乘じ直に此府を襲撃せんとせし此時壁上に在る一人の僧敵陣の動搖を見認め是只事に非ずとて遽に相圖の鐘を鳴らして危急

を告げきバ城兵大に驚き速に城壁に馳せ至りて嚴に守備を設けたれバルイを却て追返され空しく汚名を殘せり

佛王ルイ英人と休戰を約して後長男フヒリップを以て王位に即しむる事を決定せしが即位の日に當りフヒリップを林中に狩せしが偶道を誤りて四方をも辨ぜざる地に迷ひ入り出んとすれど出る事能はず漸く從者の捜索に逢ひて歸る事を得たれ共已に痛く寒氣に冒され身體全く困弊して遂に一命も危き病とあれるルイ深くフヒリップを愛せしうバ之を見て大に憂苦し其病を祈らんとてヴーマス、エ、ベケットの墓に巡拜せんと思ひ發足に及びしが老年の身にて子を思ふ餘り頻りに里程を急ぎ深く心を苦しめけきバ之が為めに其身を害し遂に痿痺の病を受て勢ひ再び治すべからざる去きバフヒリップ即位の時に當り盛なる儀式を以て之を祝せりと雖もルイも病の為めに其景況を目擊する事能はれ其後猶兩三月を維持せしが死期已に近つける時遺命を傳つて其所有物を盡く貧人に分ちしめしと云ふ

ルイの在位中トローバドール詩人の一流に至りしと云ふ是等の詩人多くハフロウヒンスの住人の詩歌流行の極

よりて其歌て國語を以て賦詠し慷慨愛情を以て吉趣とせしが其間詞句雅暢なる者少なからぬと雖も大抵組立甚だ疎よりて文字の佳ならざる者多かりしとぞ此時代又僧侶演劇を設けしより因り佛國より於て梨園の嚆矢を開きしが其趣意て大約經文より記載せる事實或て神聖の物語等よりて之をマイステリース（深妙の意）と呼て總て宗旨の祝事あれば之を演設するを以て要用とする事永年連綿たりしと云へり

第二回十字軍の時より當りペラスタイニ恢復の為め軍務より從事せし數多の大將は位階事歴を區別せんが為めに紋印及び人の異名を定めしが此例遂に永世に存するに至れり是時ルイは始めて王の表章としてフレエル、テ、リスを執しが此章實に百合花ありしか或は古代佛國に用ゐし手槍は鋒ありしか古物鑒定家と雖も之を辨識する事能はぬ然も共古實を掌る記者は大抵槍鋒の説に左袒せと云へり

内村耿之介　校

佛國古今通史卷之二終